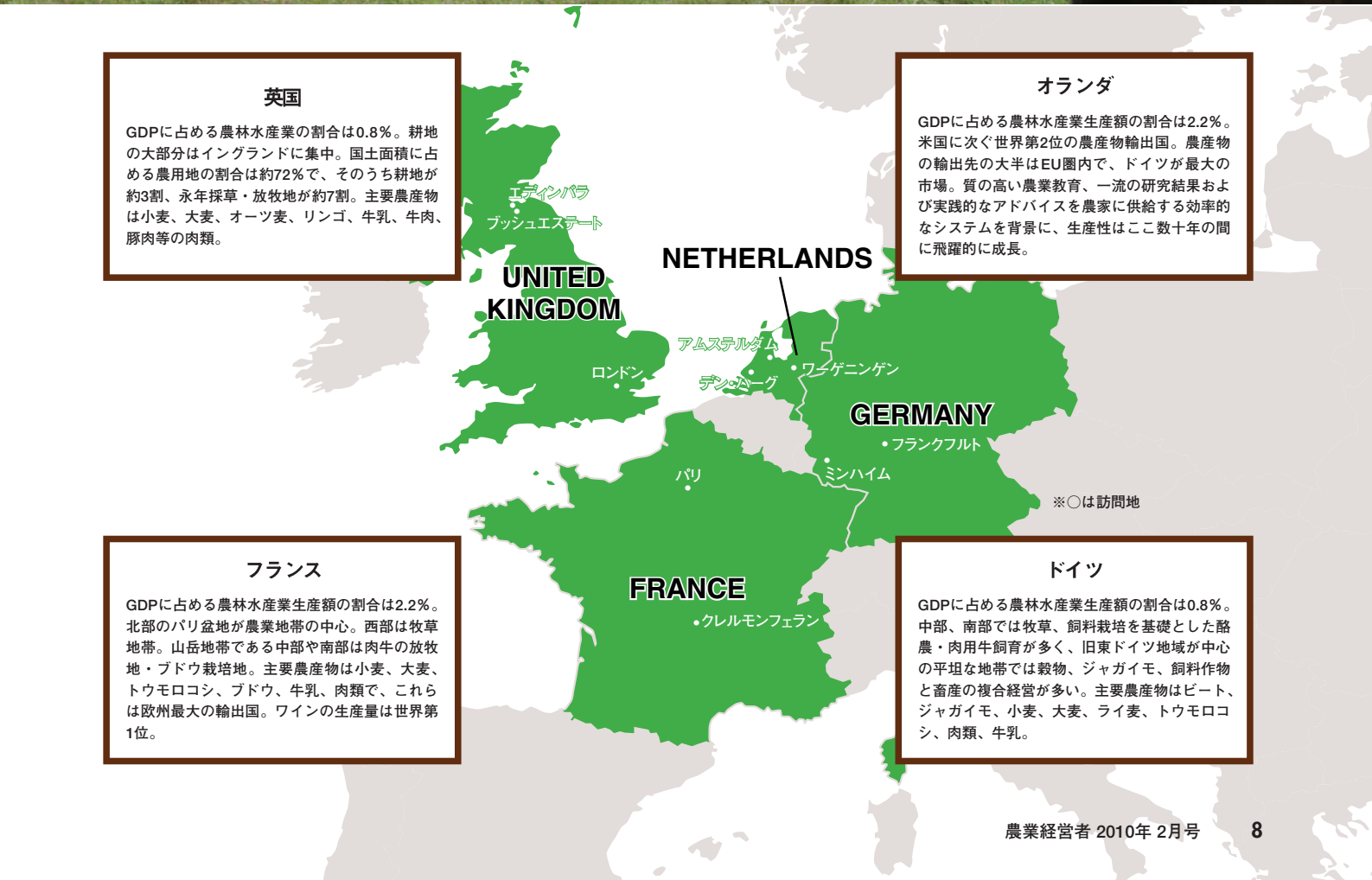
海外レポート

坂上 隆の 欧州4カ国周遊記

日本と同じ先進国と言われる欧州。我われの農業と何が同じで何が違うのか。違いはどこから生まれるのか。それは日本の農業経営にどう役立つか。欧州4カ国の現場を歩いた、坂上隆がレポートする。

坂上隆 Takashi Sakaue

㈲さかうえ 代表取締役。1968年鹿児島県生まれ。150haの作付面積で、青汁用ケール、ポテトチップ用ジャガイモなどを生産、提携メーカーへ全量出荷する。03年、トウモロコシ事業に参入。コーンサイレージ製造販売とデントコーン受託生産管理を組み合わせた畜産ソリューションを日本で初めて事業化。本誌で「坂上隆の幸せを見える化する農業ビジネス」を連載中。



英国

GDPに占める農林水産業の割合は0.8%。耕地の大部分はイングランドに集中。国土面積に占める農用地の割合は約72%で、そのうち耕地が約3割、永年採草・放牧地が約7割。主要農産物は小麦、大麦、オーツ麦、リンゴ、牛乳、牛肉、豚肉等の肉類。

オランダ

GDPに占める農林水産業生産額の割合は2.2%。米国に次ぐ世界第2位の農産物輸出国。農産物の輸出先の大半はEU圏内で、ドイツが最大の市場。質の高い農業教育、一流の研究結果および実践的なアドバイスを農家に供給する効率的なシステムを背景に、生産性はここ数十年の間に飛躍的に成長。

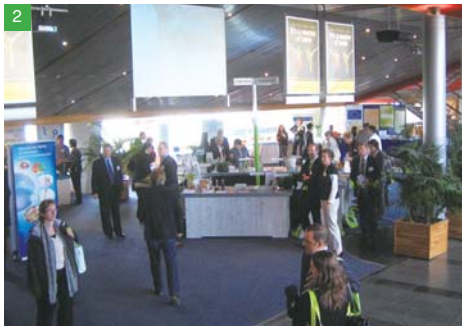
フランス

GDPに占める農林水産業生産額の割合は2.2%。北部のパリ盆地が農業地帯の中心。西部は牧草地帯。山岳地帯である中部や南部は肉牛の放牧地・ブドウ栽培地。主要農産物は小麦、大麦、トウモロコシ、ブドウ、牛乳、肉類で、これらは欧州最大の輸出国。ワインの生産量は世界第1位。

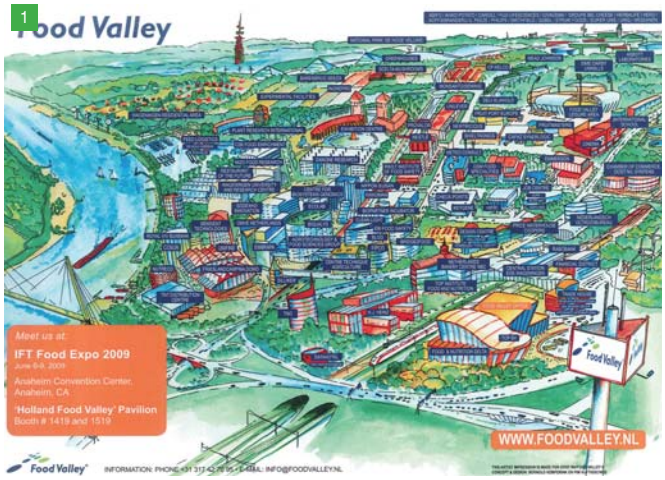
ドイツ

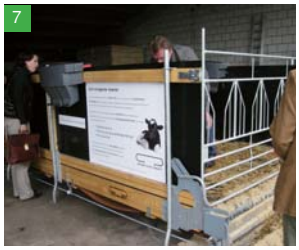
GDPに占める農林水産業生産額の割合は0.8%。中部、南部では牧草、飼料栽培を基礎とした酪農・肉用牛飼育が多く、旧東ドイツ地域が中心の平坦な地帯では穀物、ジャガイモ、飼料作物と畜産の複合経営が多い。主要農産物はビート、ジャガイモ、小麦、大麦、ライ麦、トウモロコシ、肉類、牛乳。

③オランダ農業経済研究所（LEI）の広報部長 ヘレン・スタフルー氏。なぜオランダ農業の競争力が高いのか、解説してくれた。



①農業研究で世界的に有名なワーヘニンゲン大学の呼びかけで、農業・食品企業、研究機関などが集う食産業クラスター「フードバレー」の全体像。②年に一度、フードバレー会員企業が集い、成果を共有する展示会。同会場でフードバレー大賞表彰式も開催。最も食産業の未来に貢献する研究・商品が選ばれる。





④牧草地におかれた完全全自動搾乳マシン。⑤運河の藻を自動ですくい、飼料原料にする機械。運河国オランダならでは。⑥中古トラクタ・エンジンを活用した水陸両用ボート。⑦床を電動回転させ、糞尿処理、敷き藁交換を自動化。⑧積み方が見事なトウモロコシサイレージ。⑨⑩燃料費ゼロを目指すソーラーパネル、特殊ガラス完備の実験トマト農場。

小国オランダが大国に勝つ理由

オランダ農業はなぜ国際競争力があるのか、研究者（写真3）に聞くと即座に5つの理由を教えてくれた。

①農家が「どうやって利益を出すか」のために絶えず投資する。経済、技術、販売の3分野で農家が出資した団体がその役割を担っている。

②国産、外国産を問わず、強みを発揮できる食品分野で商品開発を展開。その結果、世界に市場が広がり、国産需要が増大する。人口小国＝内需の限界をカバーする成長戦略だ。

③国際競争力が利益の源泉と認識する。農場倒産などのマイナスに見える要素も肯定的に捉える風土があり、生産性の低い業界をあえて底上げせず、高い業界を伸ばすことに注力する。

④先端技術や新品種、農業資材を積極的に海外移転する。その結果、開発企業の国際競争力が高まり、農家は、国際標準技術を低コストでいち早く使える恩恵を得る。

⑤農業政策に関して、生産者団体、政治家とが同じテーブルについて立案する。現場サイドの合意を得ているため、その実施、普及スピードが速い。「だから、オランダにはフランスやドイツと違って、農家の抗議運動やデモがない」と言い切る。建設的だ。

世界最大級の畜産業界展示会「ソム・デュ・ルバージ」をみてきた。世界50カ国から、展示企業1150社、来場者8万人が集った。開催地クレルモンフェランはフランス中部の畜産地帯の中心に位置する。

会場では1800頭の家畜展示も行なわれたほか、展示分野は、畜産、牧草、畑作、草刈り関連が中心。

膨大な展示の中、日本でも有益そうな機械類としては4分野あった。草地転換用の作業機、多様なオプションを持つモア、大型トレーラー、一部の林業機械だ。注目すべきは、農場設置用のソーラーパネルが活況を呈していたこと。農家の新たな収入源として再生エネルギー投資が進むトレンドを垣間みた。

その後、肉牛の一貫経営をする畜産家を訪問。山間放牧を取り入れており、夏季は放牧し、冬季は牛舎の中で飼育する体系だ。80頭の搾乳牛と15頭の乾乳牛を母体にした経営体系。耕地総面積は310ha、そのうち牧草地は150ha、飼料用穀物生産地は30ha。牧草は干草が中心で、収量は3・7t。売上はわずか9万1500ユーロ（1200万円）。直接支払はha当たり137ユーロ（1万7900円）で、310haでは4万2470ユーロ（560万円）を受け取っている。

農業大国フランスでみた伝統的畜産と新たなトレンド

①②自走式の大型モアとトラクタ接続型のモア。多種多様なアタッチメントが用意されている。欧州はどこにいっても草がきれいに刈られているが、こうした専用モアが各地で活躍している。③農場・空地設置を意識した大型太陽光パネル。④大型トラクタ牽引で30tも運搬可能なトレーラー。⑤糞尿自動収集機械。畜舎で実用的に使われている。⑥⑦訪問したクレルモンフェランの肉牛一貫経営農場の放牧風景。納屋や畜舎は古いが趣がある。⑧機械整備に対応する道具がところせましと収納されたワークショップ。⑨バギーが農場内での荷運び作業に活躍。⑩旧型のDEUTZ FAHR製トラクタ。

ジョンディア欧州本社を訪問 同社製品のスピリッツに触れる

①ジョンディア社の前身、ランツ社の創始者ランツ氏の銅像（同社は米国のジョンディア社と欧州を代表するトラクタメーカーランツが合併して世界メーカーになった）。②ランツ社製トラクタ第1号。この１号機から設計図とパーツのすべてを残しており、技術と整備の伝統の継承が行なわれている。③オレンジ色のジョンディア。ジョンディアカラー「グリーン」でないジョンディアも特注で頼めることをはじめて知った。④子供から寄せられたトラクタ絵画の展示。農業が小さいときから身近になるよういろいろな嗜好を凝らす。⑤ドイツのブドウ農家。彼の自家製ワインとさかうえのオリジナル焼酎を交換して、親交を図った。

1

2

3

4

5

欧州でもっとも大規模がすすむ英国 利益確保のための差別化を模索

①事故率を減らすよう工夫された子豚の畜舎。動物愛護のための規制が厳しく、日本と比べ敷き藁がフンダンに使われる。②英国スコットランドの広大な遊休地。「ここで日本野菜を作る」（ナマヤサイ社のロビン氏）らしい。③ 日本にない形状のサイレージ・カッター。④灌漑用の巨大なリールマシン。欧州畑作の定番装備だ。⑤⑥クラッシャーが入っているコーンサイレージ。⑦菜種の搾油機械。油を抽出して独自ブランドで販売、ペレット化したものは飼料化する。油原料としての出荷と比べ、利益率は３倍になったという。

1

2

3

4

5

6

7